

イランの Satoumi

ゲシュム島はペルシャ湾口ホルムズ海峡の北端に位置する長さ約 100km、幅約 10km の大きな島で、島の周囲の海岸線全体がユネスコのジオパークに指定されているが、人口は約 11 万人に過ぎない。島の主な産業は石油掘削・精製、漁業、観光業だが、島の人口の約 3 割が漁業関係者で占められている。漁業は、島の南側で主にイワシの巻き網・定置網が行われているが、漁獲したカタクチイワシはそのまま天日干して、養殖魚餌用の飼料に加工されているので単価が安い。島の北側に発達しているマングローブ林は、クルマエビ・ワタリガニ・コウイカなどの水産資源が豊富である。イラン本土ではシーア派が圧倒的多数を占めるが、ここゲシュム島ではスンニ派が多数を占める。島内を車で走っていると、あちこちで二つの尖塔を持つスンニ派モスクが見られるが、所々に一つの尖塔を持つシーア派モスクも見られる。現地の人によると、両派の対立はこの島では全く見られないということで、街を散歩していてもきわめて平和な雰囲気だった。

イラン政府はこの島を「持続可能な漁業とエコツーリズムを軸にしたエコアイランド」特区としてトルコ全国のモデル地域とすべく、様々なプロジェクトを推進している。その一つとして、JICA (Japan International Cooperation Agency; 国際協力事業団) による「エコアイランド構想実現マスタープラン作成プロジェクト (2015.11~2018.3)」が進行中である。

JICA プロジェクトの一環として、2016.7.25 (月)、ゲシュム国際会館で行政担当者・漁民・旅行者、約 80 人を対象に開催された「環境技術セミナー」に参加した。午前中 1 時間かけて、英語→ペルシャ語の同時通訳を介し「Satoumi 概念と日本・インドネシアにおける Satoumi 創生例」について報告した。その後 30 分間、参加者から「漁業資源管理をどう行えば良いか?」、「禁漁期間をどう定めるか?」、「有効な海洋環境保全策は?」、「マングローブ林はアマモ場と同様な機能を果たすか?」、「筏とロープによるカキ養殖の違いは?」、「漁家の生計を向上させる有効な方法は何か?」など時間内では収まりきらない多くの質問が相次いだ。

午後のセミナーは、立命館アジア太平洋大学の Vafadar 准教授 (イラン人で、学位取得後、金沢大学に 3 年間在籍し、「能登里山里海構想に関わるエコツーリズムの実態」を研究していた) がペルシャ語で「ゲシュム島の伝統知と工芸品を探るエコツーリズム」という 30 分の講演を行った。その後、参加者が島内の地域別に六つのグループに分かれ、それぞれのエコツーリズムの在り方を考え、グループ討議の結果を報告しあって、ジオパーク・工芸品・水産業を組み合わせたエコツーリズムの在り方を議論した。

Satoumi は沿岸海域環境と人間の共存、ジオパークは地質環境と人間の共存を目指した概念である。両概念に基づいた水産業とエコツーリズムの発展が、ゲシュム島の持続可能な社会建設に繋がる可能性はある。

2016 年 8 月末には、このセミナーに参加した漁協の組合長 8 名が日本を訪問し、日生・志摩の里海を視察するとともに、燧灘・伊吹島のイリコ作業場を訪問して、漁獲したカタクチイワシを湯がいてから天日干して、チリメン・イリコ化することで付加価値を高めることを学ぶ予定になっている。

(柳 哲雄、国際 EMECS センター)